

## 論文概要書

堀 千晶

本論文は、ドゥルーズ思想における「出来事」と「生成変化」という概念をめぐって、その論理構造と政治的射程を探究しようとするものである。論文は三部構成であり、第Ⅰ部と第Ⅱ部は「出来事」を、第Ⅱ部と第Ⅲ部は「生成変化」をそれぞれ主に扱う。主要な典拠として、第Ⅰ部はライプニッツ的論理を、第Ⅱ部はシェリング的論理とスピノザ的論理を、第Ⅲ部はスピノザ的論理を中心に論ずる。各部はそれぞれ三章からなり、各部の前半は論理構造の叙述を主とし、後半は政治論へと考察を広げてゆく。

第Ⅰ部「出来事の論理」においては、ドゥルーズの思考の基本的な骨格を浮彫りにすることを目指す。第一章「時間と真理」でまず確認するのは、思想的変遷を幾度も遂げたドゥルーズが堅持しつづけた問題は、感性界における生成変化を肯定するばかりでなく、生成変化のアイデア／アイデアの生成変化を同時に思考する点にある、ということである。プラトン主義的な伝統では、アイデアは根本的に理念的な同一性をまとうものであり、あらゆるアイデアが、同一性以外の何ものでもない純粋な同一性であるとされる。すなわち、同一性のアイデアと、アイデアの同一性との一様性である。これに対してドゥルーズは、「生成変化」を、「コピー」（感性界）ではなく、「モデル」（アイデア界）に持ち込むことで、純粋な生成変化のアイデア、すなわち、それじたい生成変化以外の何ものでもない生成変化を提言する（ただし、アイデアを内在的なものに変えつつ）。このことによって、感性的な現実存在の水準での生成変化が、理念的水準で累乗化されることになる。こうした構図が、『意味の論理学』、『千のプラトー』、『シネマ』という、それぞれまったく異なる著作で反復されることを確認しつつ、大きな区分けとして、一方には『意味の論理学』における表層の出来事の発散と分裂、『シネマ2』における虚偽の累乗＝力能があり、他方には『千のプラトー』における器官なき質料－力能の連続変化があることを確認する（『千のプラトー』は主に第Ⅲ部で扱うことになる）。この点と関連して、ドゥルーズ、ドゥルーズ＝ガタリが、いかにして「固有性＝所有」を換骨奪胎してゆくか、という議論が、論文全体を貫く基調となる。

こうした点を踏まえたうえで、第Ⅰ部第一章と第二章「ライプニッツ／ドゥルーズ——神、世界、自我」では、運命論、あるいは「偶然的な未来」をめぐる伝統的な議論を辿り、1. 必然的な運命論（ディオドロス）、2. 仮説的な運命論（アリストテレス）、3. 仮説的な可能世界－多世界論（ライプニッツ）、4. 脱仮説的で無原理的な多世界＝単一世界論（ドゥルーズ）の区別を行う。1. 必然的な運命論は、この世界で起こることを、未来も含めて絶対的な一意性のもとに置く最も強固な決定論であり、2. 仮説的な運命論は、生起する出来事にもとづいて、未来を場合分けし、複数の選択肢を未来にかんして保持しつづけておくものである。この両者はいずれも単一世界論である。3. 仮説的な可能世界論のライプニッツは、生起する出来事（シーザーがルビコン河を渡る／渡らない）の仮説的な場合分けにもとづいて、渡る場合は世界A、渡らない場合は世界Bという具合に、世界を複数に分岐させる。そうした諸世界の割り振りの原理が、共可能性／不共可能性であり、共可能的なもののみが集まってそれぞれの世界を形成するとされる。こうして分岐した無数の世界をとりまとめたものが、『弁神論』に登場する有名な「ピラミッド」の形象であり、その頂上にある最善世界が、現実存在するよう神によって道

徳的に決定されることになる。4. 脱仮説的で無原理的な多世界＝単一世界論のドゥルーズは、ライプニッツが区分けした諸世界の境界に穴をあけ、不共可能的なものが、ひとつの宇宙のなかで共存すると主張する（ボルヘスがテーゼとして主張し、ロブ＝グリエが具体的な作品として実行したもの）。これはドゥルーズが、「ネオ・バロック」と呼ぶ構造であり、それによって彼は、世界を仮説にもとづいて場合分けし切り分ける構造そのものを解体し、世界間をへだてる壁に穴を開けるのに加え（脱仮説化）、さらには、あらゆる可能的なものの《外》——いかなる可能性も存在しない零度でありながら、そこから可能的なものが産出されるピラミッドの「暗き底」ないし「無底」——を、措定することで、いかなる先行的な法や原理も存在しない無原理的で無仮説的な境位を押し開く（無原理化）。こうして、ピラミッド内の他の可能世界に属する不共可能的な出来事が、世界のなかに闖入してくる相——他世界からの出来事の到来——と、ピラミッド＝可能的なものの総体を発生させながら、ピラミッド全体＝可能事の領野全体を書き換える相——無世界からの出来事の到来——が本論文では区別される。後者は第Ⅱ部で、シェリングとの関連でより仔細に論じられることになるだろう。

第Ⅰ部第三章「カオスモスを信じること——潜在的なものの蜂起」では、上記の議論を受けて、『シネマ』以後、晩年にかけて見られる「世界を信じること」をめぐる議論を、単一世界以上複数世界未満の宇宙としての「カオスモスを信じること」として位置づけ、不共可能的な出来事の到来との関連に置いた。すなわち、彼が信じているのは、単純にこの世界のことでもなければ、夢のような別の世界でもなく、強い意味での他者としての出来事が、最高度の異和として、決して解決されることのない問題として、この世界のうちに内在化されるということなのである。ドゥルーズの議論を、「多世界＝単一世界」論ないし「単数以上複数未満の世界」論として位置づけるのは、彼がライプニッツ的な仕方で、不共可能性によって区分けされる諸系列（諸世界）への発散を堅持しながら（多世界化傾向）、しかし、不共可能的な無数の出来事を、ふたたびひとつの宇宙において交叉させるからである（単一世界化傾向）。決して調和することのない諸世界を交叉させるドゥルーズの単一世界化傾向は、この世界のなかに、その世界と強い意味で両立不可能なものが侵入することを肯定し——ライプニッツはどの世界においても、あくまで共可能的なものからなる調和的なヴィジョンを構想していた——、この世界を別様のものへと変えることを肯定する点で、一種の批判概念として機能する。それは、この世界の概念のなかには含まれない不可能な出来事を、この世界が綜合するということであり、絶対的に還元しえない世界じたいにとっての他者こそ、共存の対象となるということである。

第Ⅱ部「生成変化の時間」では、第一章「出来事の裂開」と第二章「愛の病——神の発生と崩壊」の前半において、本論第Ⅰ部の出来事論を整理し直し、ドゥルーズにおける「出来事」概念を、三つの相に区分けする。可能世界論的な語彙で言うなら、ドゥルーズにとっての出来事は、その基本的な規定において、当初より無数の諸世界をまたぐものとして構想されている。すなわち、「シーザーはルビコン河を渡る」と「シーザーはルビコン河を渡らない」は、ひとつの出来事なのである。このように無数の世界に出現しながら、しかし、それじたいではどの世界にも固有の仕方で属することのない出来事の相を、本論文では「出来事A」と呼ぶ。出来事Aは、いわば諸世界の狭間に陣取り、どの世界の所有物にもならない。それに対して、それぞれの世界、あるいはそれぞれの領域（記憶、想像、感性、言語等）

と相関することで、個々の枠組のなかで屈折しながら出現することになる出来事の相を、本論文では「出来事B」と名づける。ところで、出来事Aについては、すでに一旦屈折し姿を変えた出来事Bをとおして、それも、不十分なかたちで、語ることしかできない。たとえば出来事Aを語ることにしたいが、それを言語という枠組のなかで屈折させることになってしまうからだ。出来事Aそのものは、発話された言葉の世界にも、想像の世界にも、記憶の世界にも、そのものとしてあらわれることはなく、それはただ、変身し分裂する思考しがたき理念的な実在として、思考の限界としてあるだけであり、ドゥルーズが言うように、掴まえようとするただちに逃げ去る。そして出来事Aが不共可能的な諸方向＝意味へと発散し、その不共可能的なものたちが不共可能性にもかかわらず同時共存することを、ドゥルーズは「生成変化としての時間」と呼ぶ。これは、第Ⅲ部で論じられる『千のプラトー』の「生成変化」概念とはまったく異なるものである。

ところで、出来事はドゥルーズにおいて、非物体的な表層の意味として位置づけられ、『意味の論理学』ではそのことによって、言語活動と結びつけられる。その際に最も根本的な問題となるのは、言語の音や文字がまだ混沌たる物体と区別がつかず、意味がまだ分節されていない世界から、言語や意味の世界そのものが分節され、分節されること、すなわち、表層そのものが発生してくることである（「動的発生」）。出来事のこの第三の相を、本論文では「出来事「/」」と呼ぶ。問われているのは、すでに表層の世界が所与のものとなっている状態における、出来事の振舞いではなく、混沌たる物体から意味の表層を切り分けることで、言語の誕生そのもの、思考の誕生そのものを演ずる出来事である（分節作用＝言語じたいを分節すること）。ピラミッドの譬喩で言うなら、出来事Bが各世界内にあらわれている出来事であり（「シーザーがルビコン河を渡る」）、出来事Aが諸世界間の狭間に位置する出来事であり（「シーザーがルビコン河を渡る」と「渡らない」という複数の方向＝意味へと同時的に発散するひとつの出来事）、出来事「/」はあらゆる可能的な出来事を集めたピラミッドの《外》——すなわち、可能的なものという範疇そのものが潰れ、可能／不可能という対比すらもはや存在しない境位——から、ピラミッドのなかに投げ込まれる可能事であり、もっと言うなら、ピラミッド＝可能性の世界全体が消滅した暗き底でのみ閃く出来事である（つまり、もはやピラミッドは潰れ、暗き底とそこに走る差異の暗き光しかない）。それは、思考の世界が保証されたなかでの思考ではなく、思考そのものの中心が崩壊した状態で、そこに閃くものであろう。思考を誕生させる、それじたいは思考しえないもの、にもかかわらず思考すること。それは、『消尽したもの』で論じられるベケットの「イマージュ」であり、『差異と反復』で論じられるアルトーの経験であり、この崩壊の危機はまた、思考の死と生が交わる場ともなるだろう。

第二章では、出来事「/」をめぐる構図を、シェリングとの関連で位置づける。シェリング的論理は、ドゥルーズがとりわけ一九六〇年代後半に援用していたものだ。シェリングが問うのは、混沌たる暗黒＝質料＝産出力能（存在）からの、光＝知性＝分節作用（思考）じたいの到来である（ドゥルーズが、闇に閃く「稲妻」＝《差異》として語るもの）。本論文では、光＝分節によって分けられたのち、「光／暗闇」という組み合わせのなかで、光との対比で表現される「暗闇」と、この「/」が発生する以前、光と対比される以前の絶対的な「暗黒」とを区別し、それが、『ザッヘル＝マゾッホ紹介』における「生

の欲動」との組み合わせのなかでしかあらわれない「死の欲動」と、そうした対比関係の外にある「死の本能」との区別に対応することを論ずる（また「稲妻」と「光」も区別する）。

シェリング的論理においては、暗黒＝混沌たる質料・産出力能（狂気）から、光＝分節（悟性）が分離し、それが、混沌たる質料・産出力能を統御しはじめることによって、個体化のシステムが生み出されることになる。すなわち、暗闇と光、存在と思考、実在と観念の調和的な結合としての「愛」による、神の発生である。だが、シェリングにおいては、《神》の実存は、神以前の神ならざるものたる暗黒から発生したものにはかならず、この神以前の混沌が、いつ暗闇と光の調和＝愛を引き裂きにくるか分からない。つまり、暗闇／光、存在／思考の調和が崩壊する「病」であり、この調和に走る裂け目こそ「自由」であるとされる。本論文では、このふたつの原理のあいだの関係を、ドゥルーズがスピノザ的な神を構成するふたつの力能——実存力能と思考力能——の並行論の問題として扱っていることを踏まえたうえで、ドゥルーズには「愛」の体系と「病」の体系、すなわちスピノザ的な神を構築する体系と、その神が破綻するシェリング的な体系があると論じた。愛の体系とは、『差異と反復』の第四章（強度・質料）と第五章（理念・思考）によって構成される調和的な並行論であり、『差異と反復』において頻繁に名前が挙がることのないスピノザが、書物の構成そのものに織り込まれている。病の体系とは、すでにふれた『意味の論理学』であり、この不調和がのちの『千のプラトー』においても基調となる。

第三章「(不)可能性の世界」では、『差異と反復』と同年に出版された『スピノザと表現の問題』において、並行論がきわめて複雑な問題を提起している点を検討する。同書における議論が、力能の並行論と属性の並行論という二層構造になっていることを確認したうえで、スピノザ論のなかに、ドゥルーズがライプニッツから抽出した多世界＝単一世界的論理構造が折り畳まれているという点を検証するとともに、並行論によって、思考の裂け目をめぐる議論が提起されている点を論じ、それがのちの『千のプラトー』や『フーコー』と通底していることを明らかにした（思考内に持ち込まれる属性間の分断に等しい亀裂、思考を産出する力能とそれについての思考の分裂）。また第三章の中盤では、ベルクソン経由のドゥルーズの「潜在性」概念を、可能性じたいを可能化する、それじたいはいかなる可能性でもない実在的なものとして位置づけ、それを暗き底の暗黒をめぐる議論と関連づけつつ、あらゆる可能性を思考する無限の知性でさえシミュレーションできないことは何かを追跡する。すなわち、ピラミッドの彼岸を、シェリング、スピノザ、ベルクソン等とともに探究するということである。そして第三章末尾では、この「可能化」をめぐる議論を手がかりに、ドゥルーズの政治論を検討する。ドゥルーズ＝ガタリにとっての、六八年五月とは、社会的ないかなる因果関係にも還元できない《外》から、社会関係を切断しにやって来る強い意味での出来事であり、それが可能的なものの領野を新たに創造するとされる。この意味で、「六八年五月＝出来事」もまたシェリング的論理の延長にある、「自由」の行為である。こうした出来事論と可能化をめぐる議論を、サルトルの議論と対比させたうえで、サルトル／ドゥルーズが共有する場を描くとともに、サルトル／フーコー／ドゥルーズの三者が、六八年以後の状況下で、「人民」、「裁き（裁判）」、「正義」の問題をめぐる、明白に交叉する場を描くことを試みる。

第Ⅲ部「ノマドの政治」では、第Ⅱ部末尾で提起した戦争機械の政治の倫理<sup>エチカ</sup>をめぐる、ドゥルーズにおけるスピノザ主義を主に論ずる。第一章「ノマドのテリトリー」においては、『プルーストとシー

ニュ』の記号論における諸世界の分断や、『千のプラトー』のリトルネロ論における領土形成の問題を、「新しい唯物論」的観点を導入しながら概観したうえで、形而上学的な領土／所有をめぐるドゥルーズのノマドロジエを、スピノザ主義的な存在論（<sup>オントロジエ</sup>実体）と生態論（<sup>エトロロジエ</sup>様態）の問題として読解してゆく。本論が注目するのは、「領土」の概念をめぐる、ノマドによる領土（固有性）の全面的放棄なのか、それとも、境界の流動する領土（固有性）なのかという、ドゥルーズが示す揺れ動きである。この点を、スピノザ的な実体／様態の区別の観点から検討し、その揺れ動きが、純粋なノマドとしての実体（純粋なアナキズム）と、ノマドを有限な仕方でも有する様態（アナキズムの分有）とのあいだでの往還に当たることを論じた。また、有限な様態の本質が規定される場を、力能の度合（*gradus*）によるグラデーション空間として位置づけたうえで、それがたんに連続的な変化の場であるのみならず、特異点の周囲で、複数の個体同士が断絶する場であることを明確化した。

第二章「力能の生態学」では、ドゥルーズ＝ガタリの生成変化論が、反アリストテレス的な一義性の存在論を背景にしているという点を踏まえつつ、生成変化をとともなう個体化が、「種」の分断——生物学的な「種」や、社会的な「種」——を超えて行われるという点を概観する。そうした個体化を背景とする生成変化においては、たとえば「人間」が「人間」の形相＝形態を有していることそのものを変形し、形相＝形態横断すること（*transformation*）、さらには、脱形相化＝脱形態化すること（*déformation*）によって、もはや「人間」でないものへと生成変化することが問われている。この際、有名な「アレンジメント（*agencement*）」の概念は、異種混淆的な質料同士を関係させることで、個体の「活動力能（*puissance d'agir*）」と「行為者（*agent*）」を創発するシステムとして規定されるだろう。また生成変化論は、変身論であることに加え、他者同士の政治的同盟論でもあり、両者が不即不離の関係にあることを強調した。つまり生成変化とは、特異性同士の同盟や結社（倒錯した共通概念）のために、マジョリティがおのれの同一性から外に出て、おのれの階級を裏切るという、きわめて具体的な実践であり、その観点から、非ユダヤ人のユダヤ人への生成変化や、非アラブ人のアラブ人への生成変化の問題を位置づける。そして同時に、マイノリティもまた、マジョリティから課される社会的身分からの逃走を行うと言われていることも踏まえつつ、生成変化がつねに多重の過程の開かれた結合であることを論じた。また、「器官なき身体」論におけるマゾヒズムが、「苦痛」によって一切の「快楽」を斥ける「歓び（*joie*）」——力能の増大——の実践であることを検討し、そこを起点として、ドゥルーズ＝ガタリが、いかにスピノザ主義を倒錯的に読み替えているかを明らかにする。そのうえで、ドゥルーズの正則的なスピノザ主義と、倒錯的なスピノザ主義の差異を検討した。

第三章「器官なき政治」では、『千のプラトー』に収められた「器官なき身体」論の初出版（一九七四年）を参照し、同テキストを翌年刊行の『カフカ』と関連づけつつ、器官なき身体論を政治的な状況下に位置づけることを試みる。そのうえで、ドゥルーズ＝ガタリが、現代社会の最も内的な敵と見なしていたファシズムと、ポスト・ファシズムをめぐる議論を、三つの器官なき身体論、資本主義－戦争機械論、情報権力論をとおして概観してゆく。ドゥルーズ＝ガタリによるこうした情勢分析を踏まえながら、第三章末尾では、抵抗主体たる「我々の時代のノマドとは誰か」という問いを追跡し、近年、商業主義的な文脈でもちいられることもある「ノマド」という語の用法を、一九世紀に遡りながら歴史的に

位置づける。現代にあつて、ほぼ完全に忘却されているのは、「ノマド」が侮蔑語であつたという単純な事実である。ノマドという語は、一九世紀においては、プロレタリアートよりも下位に置かれる下層民を、人種差別的、民族差別的な含意を込めて、名指すためにもちいられた語であつた。こうした点を踏まえながら、ドゥルーズ＝ガタリがノマドを肯定的な意味へと反転させたということを再確認し、それが、彼らの政治論にどう接続されるかを見た。というのも、彼らにとっての政治的主体とは、階級に属する者である以上に、階級外の者、マイノリティだからである。しかし同時に、労働者階級を政治主体として単純に切り捨てるわけでは毛頭なく、あくまで資本主義批判の文脈を堅持したうえで、プロレタリアート、階級外の者、アナーキスト、マイノリティといった諸側面が、生成変化＝同盟論において、裏切りや背反をともないつつ、結合されてゆくことを論じた。

結論においては、ドゥルーズのいわゆる「非人間主義」につきまとう誤解を掣肘しながら、彼がなぜ「人間」中心主義を批判するかを述べるとともに、彼の無人島論／砂漠論が、核時代を背景にした実存論となっていることを論ずる。